

2018年度国際版画美術館事業報告書【展覧会版】

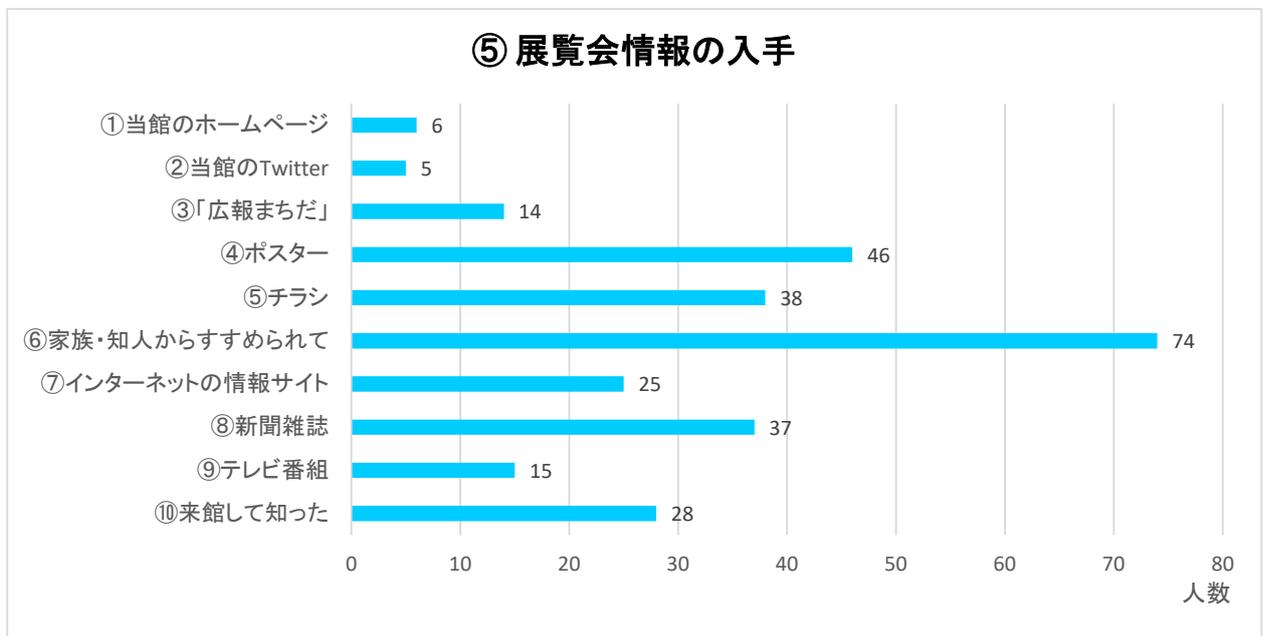
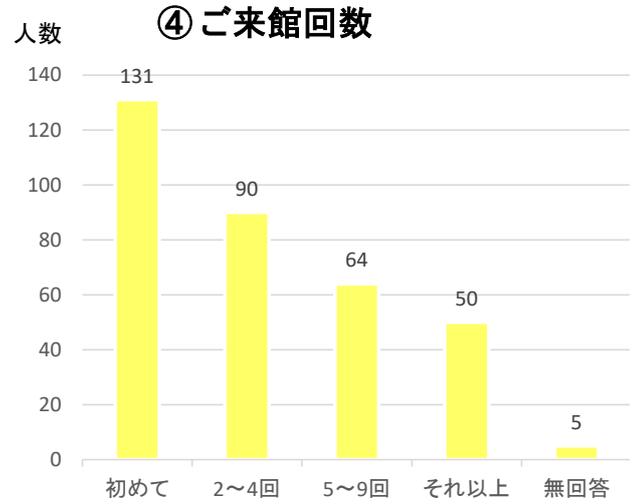
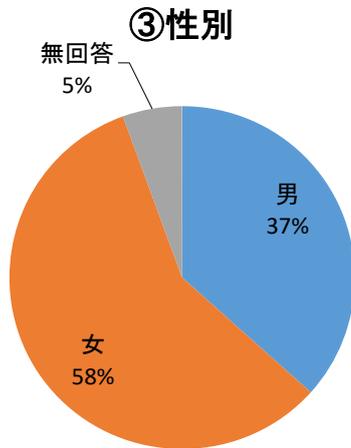
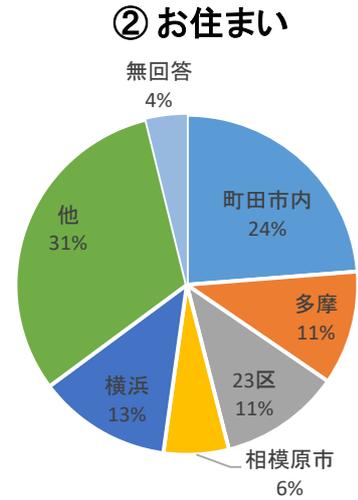
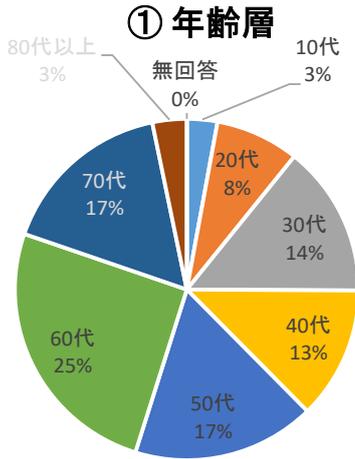
展覧会名	ヨルク・シュマイサー 終わりになき旅			担当者名	和南城 愛理			
会期	2018年9月15日～11月18日			開催日数	56日間			
協賛・後援・協力	共催：読売新聞社、美術館連絡協議会 助成：オーストラリア政府、豪日交流基金、オーストラリアnowスポンサー 協賛：ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜、日本テレビ放送網 協力：日本航空、国立極地研究所							
巡回館	奈良県立美術館(2019年4月13日～6月2日)							
展覧会概要	ドイツ出身の銅版画家ヨルク・シュマイサー(1942-2012)の逝去後初の本格的な回顧展。世界各地を旅した経験から生み出された作品で知られる。京都に留学したことから日本と深い関わりがあり、1960年代から亡くなるまで、日本でも定期的に作品を発表していた。遺族および日本国内の関係者の全面的な協力を得て、初期から晩年までの主要作品を網羅する約180点の作品による回顧展が実現した。							
ねらい・対象	シュマイサーの回顧展は1990年代半ばに、オーストラリア国内の美術館を巡回する展覧会が開催された。本展はそれ以降の作品を加えるとともに、内容をさらに充実させた本格的な回顧展を目指した。国際的な活動を行うなかでも常に日本との関わりを保ち、当館でも90点の作品を収蔵する作家の画業を概観し、知名度が高いとは言えないシュマイサーを広く紹介するとともに、今後の評価につながるための基本情報を提供することを目的とした。							
関連催事	催事名	開催日	タイトル	講師等	参加者数			
	講演会	10月20日(土)	シュマイサーと日本	黒崎彰氏 (版画家)	55			
	特別ギャラリートーク	9月23日(日)	シュマイサーが訪ねた地・南極	橋田元氏(国立極地研究所准教授)	30			
	特別ギャラリートーク	9月29日(土)	シュマイサーが訪ねた地・インド、ラダック	山本高樹氏 (写真家)	10			
	特別ギャラリートーク	11月4日(日)	シュマイサーが訪ねた地・オーストラリア、アーネムランド	窪田幸子氏 (神戸大学教授)	25			
	ギャラリートーク	11月11日(日)	シュマイサーの技法	小野修平氏 (版画家)	60			
	ギャラリートーク	10月14日(日) 10月27日(土)	学芸員によるギャラリートーク	担当学芸員	30 30			
	版画工房見学	11月3日(土)	もっと近くで見てみたい！ 銅版画が生まれるところ		295			
	プロムナード・コンサート	11月17日(土)	偉大なる作曲家とめぐる版画の世界	高橋里奈氏 (ピアニスト)	383			
観覧料	一般	65歳以上	大・高生					
	800 円	400 円	400 円					
観覧者数 (現在)	有料計	無料計	総観覧者数	内、一般	内、65歳以上	内、大・高生	内、小・中生	内、その他
	5,705 人	3,243 人	8,767 人	6,235 人	1,730 人	468 人	334 人	人
	目標値	11,600 人						
主な収入 (現在)	観覧料収入		図録販売収入		受託販売収入		その他の特定財源	
	3,077 千円		1,737 千円		224 千円		783 千円	
事業経費	巡回展負担金	6,000 千円						
	講師謝礼	400						
	事業協力謝礼	180						
	図録買取	2,160						
	額装	195						
	広告宣伝委託(HP)	562						
	ポスター等作成委託	1,602						
	ディスプレイ	541						
		11,640 千円						

<p>主な広報・取材等の講評</p>	<p>日本経済新聞10月3日「文化への尽きない探究心」 朝日新聞10月16日夕刊「世界を旅した銅版画家」 芸術新潮2018年11月号「ヨルク・シュマイサー 果てなき旅の記憶」 青い日記帳(アートブログ)「2018年展覧会ベスト10」第10位 12月30日 日曜美術館アートシーン 10月21日放映</p>																												
<p>アンケート結果</p>	<table border="1"> <tr> <th>回収数</th> <th>回収率</th> <th>市民率</th> <th>リピーター率</th> <th colspan="3">満足度(とても良かったと良かったの率)</th> </tr> <tr> <td>347 件</td> <td>4 %</td> <td>24 %</td> <td>59 %</td> <td>企画の内容</td> <td>展示作品</td> <td>展示の仕方等</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>94.8 %</td> <td>94.7 %</td> <td>82.8 %</td> </tr> </table>	回収数	回収率	市民率	リピーター率	満足度(とても良かったと良かったの率)			347 件	4 %	24 %	59 %	企画の内容	展示作品	展示の仕方等					94.8 %	94.7 %	82.8 %							
回収数	回収率	市民率	リピーター率	満足度(とても良かったと良かったの率)																									
347 件	4 %	24 %	59 %	企画の内容	展示作品	展示の仕方等																							
				94.8 %	94.7 %	82.8 %																							
<p>主なご意見</p>	<p>別紙のとおり。</p>																												
<p>予備調査</p>	<p>美術館連絡協議会の海外派遣研修制度を利用し、2015年6月にオーストラリアで約2週間の調査を行った。シュマイサー一家に保管されている作品と資料に加え、オーストラリア国立美術館でも作品の閲覧を行った。自宅スタジオをはじめとする関連施設もあわせて見学した。日本国内ではコレクター所蔵の作品調査を行うとともに、関係者を訪ねインタビューを行った。</p>																												
<p>輸送費</p>	<p>本展はオーストラリアからの作品借用があるため、輸送費が大きくなることが予想された。このため巡回館を募り、予算の増大を図った。シュマイサーとの関わりが深い関西地方の美術館数館に打診し、最終的に奈良県立美術館での巡回が実現した。豪日交流基金には関係者の渡航費用と輸送費を中心に助成を申請し、1万豪ドル(約80万円)の助成を受けることができた。また日本航空株式会社からは航空運賃割引の協力を得るなど、負担の軽減に努めた。</p>																												
<p>作品選択</p>	<p>上記の作品調査と文献や年譜の記録から、主要な作品を選定し、出品希望リストを作成した。そのうちほぼすべての作品を、シュマイサー一家および日本国内のコレクションから揃えることができた。関係各位の全面的なご協力をいただいたことが大きい。そのうち44点が当館のコレクションで、これは当館が所蔵するシュマイサー作品のほぼ半数にあたる。反省点としては出品点数が多く、特に第二企画展示室がごちゃごちゃした展示となってしまった。アンケートにもそれが表れている。</p>																												
<p>図録作成</p>	<p>求龍堂が一般書籍としての刊行を引き受けてくれたことから、出版部数を増やして単価が抑えられ、出品作品全点のカラー図版掲載と全面的な日英併記が実現した。当館では同社より1,000部を購入し、うち700部を販売分とした。シュマイサーとゆかりの深い岡村印刷による印刷の美しさもあり、会期終了前に販売予定分を完売し、160部を追加販売した。シュマイサーのまとまった文献は英文のものはあるが、邦文では1987年以降は出版されていなかったことも好調な売れ行きの一因であろう。</p>																												
<p>ディスプレイ</p>	<p>今回の展覧会は豪日交流基金の助成を受けたことから、図録とともに全面的な日英併記とした。外国人来場者が楽しそうにパネルを読む姿も見られ、看視員に「いつも来ているが、今回の展示はとてもよかった」と話しかけてきた市内在住の外国人もいたとの報告もあった。翻訳には費用も時間もかかり、また文章量が増えるためパネル類が大きくなるなどの問題があるが、2020年に向けて検討すべき課題であると実感した。</p>																												
<p>工夫点・反省点と改善方法</p>	<p>広報</p> <p>毎回行っている、200社以上のマスコミ各社へのプレスリリースの送付、公共機関へのポスター類の送付に加え、駅貼りポスターを実施した。美術館連絡協議会でも招待券の配布や読売新聞多摩版への記事掲載を行ったほか、求龍堂がマスコミ各社や主要プロガーに図録と展覧会の案内を行ってくれた。美術館ウェブサイトでは特設ページを設け、イベント報告を中心にブログを10回更新した。公式ツイッターではイベント告知や出品作品紹介など35回の投稿を行い、インプレッション(ユーザーが見た回数)は124,000回を越えた。</p> <p>今回、広報面で大きな力があつたと思われるのは、来場者が発信したツイッターである。会期後半になるに連れて投稿数が増し、来場者数もふえていった。知名度が高くなく会期前半は客足が伸びなかったこともあり、早い時点から投稿を促す工夫ができていれば、来場者数を増やすことができたのではないだろうか。広告費に限られるなか、非常に有効な手段になると感じた。</p>																												
<p>写真撮影</p>	<p>本展では「シュマイサーを広く知ってもらおう」という主旨から、著作権者と作品所蔵者の全面的な理解と協力を得て、会場内をすべて撮影可能とした。来場者には好評で、前項で述べた来場者のツイッターが多かったのも、自分で撮影した画像を気軽に載せられる点は大きかったのではないだろうか。各自が気に入った画像を紹介することで、多彩な作品がインターネットにあらわれ、広報上の効果を生み出してくれた。また来場者はどのような作品に関心をもったのかを知ることができ、その点でも興味深かった。今回は会場内では大きなトラブルはなかったが、アンケートには「シャッター音が気になった」との感想がやはり散見され、マナー喚起の継続的な必要性が感じられた。</p>																												
<p>イベント</p>	<p>黒崎彰氏の講演会は、版画家としての的確な分析と、40年以上に渡る交流ゆえの温かなまなざしが感じられ、充実した内容となった。特別ギャラリートーク「シュマイサーが訪ねた地」では、作家が描いた世界各地のうち、気軽には訪ねられない場所を3ヶ所選び、そこを実際に何度も訪ねたことがある方にお話いただいた。現地に立った方ならではの非常に興味深いお話をうかがうことができ、違った角度から作品を見る手がかりとなった。技法についてのトークでは自身が銅版画家である講師が、自ら制作した版や刷りの見本を交えて解説を行い、多数の参加者が最後まで熱心にトークを聞いていたのが印象的だった。</p>																												
<p>その他特記事項</p>	<p>本展は豪日交流基金の助成を受けたことから、ちょうど2018年にオーストラリア政府が日本で開催したプロジェクト「オーストラリアNOW」の参加イベントとなり、同プロジェクトのインターネットサイトや印刷物でも広報された。</p>																												

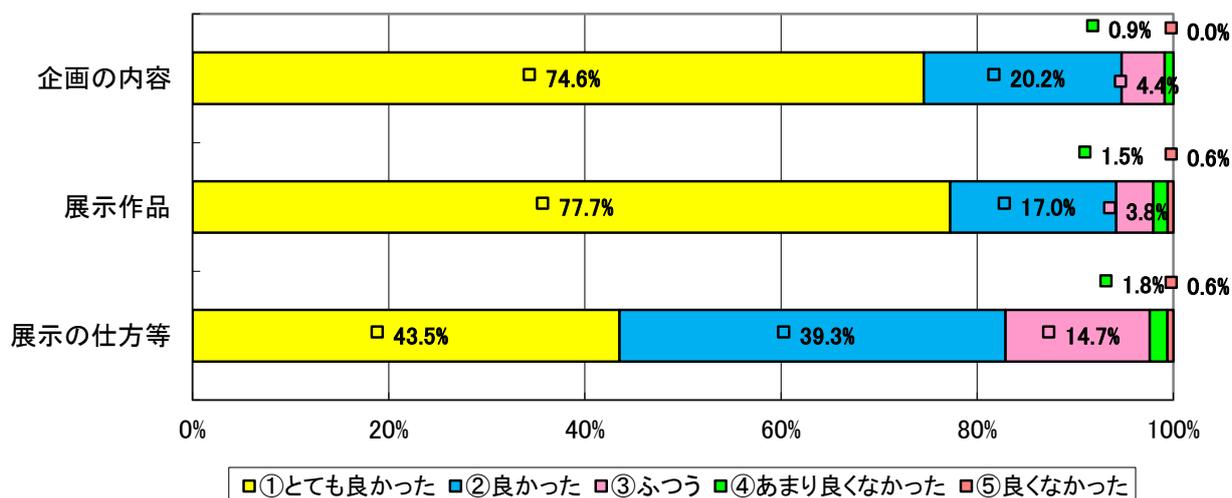
# 「ヨルク・シュマイサー 終わりなき旅」展 アンケート集計結果

開催期間：2018年9月15日（土）～11月18日（日）

回答者数： 347 人（総入館者数：8,767人 アンケート回収率： 4%）



## ⑥ 回答者の満足度



## ⑦ 主なご意見・感想

- ◆これまで知らなかった素晴らしい作家を知ることができた。あまりメジャーでない作家の展覧会は発見が多い。
- ◆ひとりの作家の作品のみを取上げる展覧会はその人の成長記録を見るかのようで楽しく興味深い。
- ◆この作家の展覧会は日本では初めてと聞いて遠方から来館した。
- ◆美術館への足の便が悪い。来館の際にいつも迷うので、公園の中を通る安全な道の案内が駅にあると助かる。
- ◆順路が分かりにくかった。導線が複雑／展示がすっきりして作品をじっくりみることができた。
- ◆解説を増やしてほしい。説明の文字を大きく。音声ガイドがほしい。／  
細かい説明がなく、絵を見て個々に感じる展示がよかった。テーマがはっきり分かり鑑賞のポイントがつかめた。
- ◆額の位置が低い、大きい作品を見るととき中腰になって辛かった。額の反射で細部が見えにくい。
- ◆写真がOKでよかった。今後も続けてほしい。／シャッター音がうるさかった。
- ◆話し声が気になった。／小声で話しても注意された。
- ◆ポスター、ちらしにひかれて来館した。
- ◆ツイッターで行った人の満足度が高いと聞いて来た。
- ◆良かったのもう一度来場した。作品をよく見たくて会場を3回巡った。久しぶりにヒットだった。
- ◆知らない作家なので図録やリストなどをもっと充実したものにしてほしかった。
- ◆良い作品を展示していても開催されていることが分からないと見に来られない。宣伝に力をいれてほしい。  
他館でちらし類を見かけない。都内在住だが情報を見かけない。町田に版画美術館があると知らなかった。
- ◆以前に図版で見て印象深かった作品が実際に見られてよかった。
- ◆都内の有名な美術館に比べても、とてもよい作品を低価格で鑑賞できるので、もっと来館したいと思った。

アンケート、そして来館者のツイッターでも「これまで知らなかった素晴らしい作家を知ることができた」という感想が多く、知名度は高くなくても、優れた作家を紹介した意義が認められたと感じている。展示を最後まで見たあと入口に戻って展示を見直す観客が多い、あるいは「もう一度見に来ました」と話しかけられた、などの例は看視員からもしばしば聞いており、じっくり展示を楽しんだ来館者が多かったと言えよう。来館の動機として、ちらし等のデザインにひかれたとの声がある反面、展覧会の情報を見かけない、他館にちらし等がないなど、広報の不十分さを惜む指摘が見られた。来館者が増えた会期後半には、展覧会情報入手先として「その他」で「ツイッター」をあげる人が目立った。日本で初の本格的回顧展だったことから、首都圏以外から足を運んだ方もあった。図録は好評で会期終了前に完売したが、シュマイサーの日本語資料は少ないのでさらに本格的なものを望む声も見られた。首都圏、それも23区の居住者から「町田は遠い」「美術館の場所が不便」との声が聞かれた。これには仕方ない部分もあるが、町田駅からの経路を分かりやすく示したり、歩いてくる道を楽しめるような工夫により、来館者のマイナス・イメージを払拭する必要を感じた。